気の病理に関する弁証法的解釈

—— 気は生体電流であるとみる仮説 ——

木 村 照

A Dialectic Study of The Pathology of *Ki*,
Action Current

Akira Kimura

(Kobe University)

In ancient India, *Ki* was considered Vayu, that was a strong corpuscle. In China, *Ki* was the source of energy. In our country, *Ki* was estimated to be spirit, mind, or electric energy. I consider that *Ki* is the action current, and is related to the blood circulation and autonomous nervous system.

Ki is moving but invisible. It exists only in the living body, not in the dead body. The blood cells move only in the living body, but stop in the dead body. The blood circulation in the body is controlled by the autonomous nervous system. Therefore I hypothesize *Ki* as the action current moving through the autonomous nervous system.

は じ め に

病は気からというが、気とは一体何であろうか。気は実在する物質であろうか。それともたんに人間の空想の産物でしかないのであろうか。このテーマが4年前にふとしたことからわたくしの脳裡に芽生えた。そして診療をはじめとしたあらゆる活動のなかでわたくしはだんだん気を自覚するようになった。

わたくしたちは日常生活でごく自然に「お元気ですか」とか「お気をつけ下さい」などと気の子のついた表現を用いている。気の特徴は、生体に対してのみ気の子を用い、死体に対して気の子の表現を行うことは決してないということである。病気も生体の一状態を意味し、死体が病気であるといった表現はありえない。死ぬ気も生体の一状態であり、死体が死ぬ気になることはありえない。元気も生体の一状態であり、死体に元気があるとかないとかとはいわない。

病気に関連する気の子の表現は実に多い。気を失う、気が遠くなる、気が沈む……など枚挙にいとまがない。それほどわたくしたちは日常生活で気の子のつくことばを頻回に用いている。

わたくしは気を莫然と理解するところから一歩進んで、気を具体的に解明しようと発起し、その第一歩として、気は自律神経系を主経路として全身を流れる電流であるとの仮説をたて気の研究に着手した。

小説における気

〇・ヘンリ¹⁾の「最後の一葉」には風雨のあとにも蔦の最後の一葉が残ったため(実はトリックであったが),それをきっかけに気を取り戻し肺炎を克服した少女の話が出ている。

志賀直哉²⁾は「和解」のなかで,子供の急病に対処するうち,「自分は自分の頭痛が何時の間にか直っているのに気がついた。そして夕方までずきずき痛んでいた根太(癱)も今はどうもなくなっていたのに気がついた」と書いている。「和解」は全文これ志賀の気の病理で貫かれている気ぜわしい短編小説である。

新田次郎³⁾の「赤毛の司天台」には江戸時代,ある浪人者の天気予想がよく当るという話が出てくる。彼は下着の感じで明日の天気が分るといい,そしてめったに下着は洗わせなかった。ところが女房を貰ってから天気予想はだめになったという。なぜなら,女房がきれいに乾いた下着を毎日きせたため,彼の勘が狂ったからである。

以上,三編には人間における気の状態が生きて生きと描かれている。

気 の 語 源

気の語源について,手もとの国語辞典⁴⁾⁵⁾⁶⁾を調べ,第1図の如く気を分類した。

気とは第一に外界の状況をいい,自然界では空気,気圧,気温,気候など,人間社会では雰囲気,熱気,色気,殺気,などの使い方がある。第二は生体の内部状況をいい,元気,活気,勇氣,気合,気力などの使い方がある。第三は外界と生体との気の流れであり,気に入る,気になる,気を配る,気が通う,気をとられる,気をうかがうなどのいい方がある。このように語源的にみれば,気字を用いる対象はそれ自体が運動し,状況が変化する宇宙の存在すべてである。

第1図 気の語源

気 の 性 状

孟子⁷⁾は浩然の気をあげ, 莊子⁸⁾は天下を通じて一気のみといった。

気とは何かについて調べたのが第1表である。古代インド医学ススルタ大医典⁹⁾のなかに体内を流通する Vayu (神経力) は目に見えないがあらゆる生命体の成長, 崩壊を決定すると記載されている。デカルト¹⁰⁾は情念論において神経系のなかを運動する動物精気¹¹⁾の存在を想定している。現在の中医学¹¹⁾では気は活動力

の強い精微物質であり, 血液と密接な関係にあると定義されている。長浜¹²⁾は気を電氣的エネルギーと解釈し, 土居¹³⁾は瞬間瞬間における精神の動きといい, 赤塚¹⁴⁾は心から出て目に見えない触手と述べた。

このように文献的には気は運動する微粒子としてとらえられ, 心とは区別されている。辞典や文献をもとに一般に想定されている気の性状をまとめると第2表の如くである。

第1表 気の解釈

人 名	文 献	気 の 解 釈
ススルタ	ススルタ大医典	Vayu (神経力)
デカルト	情念論	動物精気
—	中医学基礎	活動力の強い精微物質
長浜善夫	東洋医学概説	電気的エネルギー
土居健郎	甘えの構造	瞬間瞬間における精神の動き
赤塚行雄	気の構造	心から出ている目に見えない触手

第2表 想定される気の性状

- 1) 目に見えない。
- 2) 生体に内在する。
- 3) 外界（宇宙）に存在する。
- 4) 生体と外界との間で交流する。
- 5) 生体同志で交流する。
- 6) 心と区別される。
- 7) 心と結びついている。
- 8) 血液と関係をもつ。
- 9) 運動する。

気滞について

東洋医学には血、気は人体の生理活動の基本物質であるという認識がある¹¹⁾。気は全身を流通するが、気に関しては気滞という病理概念がある。感情抑鬱、飲食失調、感染、外傷などの原因で気滞（気の流通障害）が起ると、症状として局所の疼痛、腫脹をきたすのである。頸や肩のこりも気滞である。一方、西洋医学には気概念はなく、ここに東西両医学に決定的な立場の相異が出てくる。

西洋医学にあっては、循環系を流れる血液は認めるが、神経系を主経路にして全身を流れる生体電流を病理学的にみる考え方は確立されて

いない。これは Virchow 以来の病理学が死体の検索を中心に細胞レベルの病変を視覚的にとらえる立場で発展してきたことと関係が深い。生体病理の立場で、病理学者が生体電流の役割をもっと研究しなければならない。

斉藤¹⁵⁾は生体磁気学概論のなかで、磁気が熱傷治癒を妨げる話や磁気嵐のとき結核、高血圧、心臓病が悪化する話を紹介し、磁気で癌を発育あるいは抑制させる実験を行っている。こうした研究こそ医学の将来のために高く評価されなければならない。

ある症例について

症例：■ 52才，男子，右側頭部腫瘍 (malignant schwannoma)

わたくしが病棟当直で午後5時過ぎ点滴に廻ったところ、本患者は1週間前から右腕が疼くので、左腕に点滴をしてほしいと訴えた。そこで、左肘部の静脈に点滴を行った。そのあと、右腕の疼く部分を診察しようとして、わたくしは患者の訴える右前腕屈側を触診すれば同部の筋肉は硬く凝っていた。さらに、わたくしの右手で同部を揉んだところ、突然に高圧電流に触れた如くわたくしの右手、右腕、右背部、右頸部、右頭部にピリッピリッと激痛が走った。全

く一瞬の出来事であった。その直後、患者の右前腕屈側をもう一度触診しなおしてみると筋肉の硬い凝りはすっかりとれていた。患者は右腕の痛みが消失し、右半身が軽くなったといった。しかし、わたくしはそれから約2時間、強い右偏頭痛を感じた。数人の同僚医師が本患者がこの一週間、右腕の点滴を嫌がることを知っていたが、わたくしの体験には半信半疑の表情であった。

なぜ、わたくしが手で触っただけで、患者の腕の痛みは一瞬にとれてしまったのであろうか。なぜ、わたくしは強い電流にふれたような

激痛をおぼえたのであろうか。これは患者とわたくしにとっては間違いない事実であったが、科学的に証明することは困難なことと思えた。

ここで、気は生体電流であるとみる仮説をたて、気滯は生体電流の流通障害という解釈を行い、改めて本患者との間の出来事を考えてみた。

「右側頭部腫瘍のため右半身に気滯が生じ、その結果右前腕に生体電流が過剰に蓄積し、それが点滴を避けさせる疼痛をひきおこしていた。当直医が手を触れた結果、蓄積していた電流は

一挙に患者から当直医の身体へ流れた。患者は気滯がとれて疼痛を忘れ、一方で電流を受けた当直医は気滯を起し、それが頭痛をひきおこした。」……と想像した。

第3表 気の位置付け

循環系と神経系は全身に分布し、相互に依存しつつ生体を統一している。

循 環 系	神 経 系
血 液	気

考 察

色不異空 空不異色
色即是空 空即是色

4年前、祖母の33回忌において般若心経を唱和した際、「色」と「空」の関係を悟った。そのカギは不異の謎が解けたことにある。

色は人間の感覚を介して認識できるもの（物質）であり、空は色の属性であるが人間の感覚によっては直接に認識することが困難なもの（電氣的エネルギー）をいう。色と空は対立物であり、色と空の関係を人間にあてはめると、色は身体、空は精神となる。また、色は血液、空は気ともなる。

色一空、空一色の順序から、身体が精神の基礎であるが、精神の身体に対する反作用のあることも示されている。つまり、唯物論の観点に立っている。血液が気（生体電流）の基礎であるが、気（生体電流）の血液に対する反作用も示唆されている。身体と精神は弁証法という両側面であり、血液と気もまた弁証法という両側面である。血気相和して全身を循環するという東洋医学の考え方は従って弁証法的観点をもつものである。ここから導き出されることは、循環障害と気滯（生体電流の流通障害）がやはり両側面をなすこと、すなわち両者は共存し、葛藤していることである。

哲学的には血液に対応する気（生体電流）あるいは、循環障害に対する気滯（生体電流の流

通障害）の存在が予言できる。それでは、気とか気滯をいかに科学的に証明するか。

もう一度、般若心経に戻り、今度は「不異」と「即是」の意味を考えてみよう。色と空の関係は不異と即是によって具体的に解き明かされている。色不異空（色は空に異ならず）とは一定条件下での色と空との同一性の関係をいい、色即是空（色はそのままに空である）とはこれは矛盾であるため色と空の斗争性の関係をいう。人間の身体と精神は一個のまとまった生命体の両側面であり、それが同一性と斗争性の関係をもつとは身体と精神が相互に相手の存在の前提となり相互に依存しながら相互に対立する状況をいう。このことはわたくしたちが医学・医療の世界でしばしばみてきたところであり、身心医学の根本でもある。

血液と気においても同一性と斗争性の関係が成り立つ。そこで、気（生体電流）を研究するためには血液を手がかりとする道が改めて認識されてくる。血液循環を調節する役割は自律神経がになっており、そういう密接な関係からいえば、自律神経の研究のなかにこそ気（生体電流）の本態を解明するいとぐちがあるといえよう。電流には(+)(-)の両側面があるが、自律神経にも交感神経と副交感神経の両側面がある。わたくしは以上のような考察を行った結果、自律神経のなかを動く生体電流こそ気の中核である

と感じた。

医学・医療はたえず科学の方向をめざしている。従って、わたくしたちは科学的な態度で医学・医療のにない手とならなければならない。しかしながら、今日の科学の水準ではまだ解けないテーマが沢山ある。例えば、わたくしが患者の身体に手を触れたら強い電流様の痛みをおぼえたこともその一つといえる。こうした場

合、哲学の方法を用いて研究方向を開くことは許されるとわたくしは考える。気ということばは日常頻回に使われるが、その使われ方をみると人間行動のうえで重要な役割をもっている。気はまた東洋医学の基本概念でもある。気の本態が西洋医学の臨床の場を通じて明らかにされたときこそ、数千年の歴史をもつ東西両医学は真に結びつくとわたくしは考える。

ま と め

気について考察した結果、東洋医学の気血理論を参考にして、気は血液に対応する生体電流であるとみる仮説をたてた。生体では血液循環を調節する役割は自律神経がになっているので、気（生体電流）は自律神経との関係が深いと推定した。

稿を終えるにあたり、服部浩教授の御校閲を感謝します。なお、本論文の要旨は第42回耳鼻咽喉科臨床会（昭和55年）にて発表した。

参 考 文 献

- 1) O. ヘンリ：最後の葉，O. ヘンリ短編集(3)
(大久保康雄訳)
- 2) 志賀直哉：和解，新潮文庫
- 3) 新田次郎：赤毛の司天台，横雨將軍信長，新潮文庫
- 4) 金田一京助，他：新明解国語辞典，三省堂
- 5) 金田一京助，他：国語辞典，三省堂
- 6) 小川環樹，他：新字源，角川書店
- 7) 孟子：岩波文庫
- 8) 莊子：岩波文庫
- 9) ススルタ大医典 I，II，III，日本医史学会
- 10) デカルト：方法序説，情念論，中公文庫（野田又夫訳）
- 11) 上海中医学院編：中医学基礎，神戸中医学研究会訳
- 12) 長浜善夫：東洋医学概説，創元社
- 13) 土居健郎：「甘え」の構造，弘文堂
- 14) 赤塚行雄：「気」の構造，講談社
- 15) 斉藤四郎：生体磁気学概論，1975.
(別刷請求先：木村 照
〒650 神戸市中央区楠町7丁目12
神戸大学医学部耳鼻咽喉科学教室)